

# 平成16年度 第2回高知県人権教育推進協議会 協議まとめ

日 時：平成16年11月2日（火）

13:30～16:30

場 所：高知会館 3階 飛鳥の間

## 1 開会

- (1) あいさつ
- (2) 日程説明

## 2 議題

- (1) 会長・副会長の選出

## 3 報告

- (1) 人権教育行政の現状について
- (2) 「子どもの人権」にかかわる現状と教育の取組み
- (3) 「高知県子ども条例」について
- (4) 子どもへの暴力防止プログラムについて
- (5) 質疑応答（ は質疑 は応答もしくは説明）

実際に落書きしてる現場を見た。どこへ連絡すればいいのか。

人権課、もしくは最寄りの市町村の人権担当へ連絡してください。また、この件は相当悪質であり、警察の方も強力に捜査しているので、警察に即通報いただいても結構です。

自傷行為は好んで自分を傷つけているととらえているのか、お訊きしたい。

好んでしているかどうかということよりも、自分で自分がそのことを選んで行ってるという、自分の意志で行ってるという意味です。

自傷行為をした人を知っているが、決して「好きな気持ち」でやっていない。自分の体を傷つけることでしか表現できないやり場のないこの行為を、好んで自分を傷つけていると受け取られるようなことのないようにしてもらいたい。

リストカットということだけではなく、薬物依存など、決して、その子達が好んでやっているともちろん思っていない。きちんとさび分けをして説明をしていく。

## 4 協議

**テーマ「子どもに関わる人権課題を解決するための教育をどう進めるか」**

おとなの意識の変革がとても難しいというふうに感じている。例えば、子どもがたばこ

を吸う。服装違反をする。その子たちが遅刻をしてくると、先生は「もう、そんな服装は違反してるから帰れ」と言う。「帰れ」と言って門から入れない。その時に、校長先生にお願いして「別の部屋を作って下さい。」「ここは、治外法権の場所にして下さい。」と言った。その時に、非常に先生方から反対を受けた。「そういうことをしたら、他の子に影響がある。一生懸命勉強してる子に示しがつかないじゃないか。」と言われた。例えば先生達は、「服装違反してるなら帰れ」と言うが、帰ったらどこへ行くのか。スーパーとかでウロウロする。それよりは、目の届く所において、その中で話をしていく方が良さだろうと思う。今は、そういう子がいても「来るな」とは言わなくなった。「来たかったらおいで」と言ってくれる。「ただし、その服装のままでは教室には入れないから、カウンセラー室にいるか、保健室にいるか、もう1つのここの場所にいるかしかできんで」という言い方をしてくれる。この変化を、私は高知県に来て「あ、高知の人って何かすごいな」と思った。

体罰ではこういうことがあった。ベテランの先生が、給食の用意を手伝わなかった子どもを、給食抜きにした。これは体罰である。ところが、その先生は全然悪気ない。そういうことが多いのではないかと思う。

おとな達が、何が体罰であり、虐待なのか、子どもたちのSOSのサインになるかを意識できる機会や研修会が必要だと思う。

保育所は、子どもたちが初めて家庭から離れて、集団で社会性を身につける場所だ。子どもを認めること、誉めること、抱きしめること。私の職場のテーマは「協力し、影響し、認め合い、ともに育ち合う」で、保育士が、保護者が、子どもが関わり合い、認め合い、紡ぎ合う、そういう姿を常に醸し出していく。細かい営みの中にいつもこうしたこだわりを持っている。

保育士が、子どものトラブル、ケンカがあった時「自分がされたらどんなに思う？」とかいう、答えを子どもから引き出す場面がある。そんな時、私は保育士に言う。「ちょっと待って、私たちは考えていく子どもを育てないかん」と。

私は自分の子育てを通じて、信じることが一番大事、信じないといけない。でもおとなは、「嘘、本当？」とかいうようなことをすぐ言ってしまう。丸ごと信じる、丸ごと自分をさらけ出して、失敗談を語る中からお互いが知り合うということ、保護者、家庭の人とも、地域の人ともやってきた。

不登校の問題について、高知県の先生方が不登校の生徒のご家庭を全国一熱心に回っているということは、県民としても誇りに思う。先生方にも自信を持っていただくことが大変大切だと思う。こども条例にしても、県の、この大変な努力をどのようにして県民の皆さんに分かっていただくか。これが非常に大切な問題だと思う。

ぼくは失敗ばかりしてきた。家族に支えられ、学校の先生や仲間を支えられ、地域の方に支えられ、その中で誇りに思える地域に生まれて良かったと思えるようになった。特に地域の方から声をかけられること、地域の中に自分の居場所があることがすごく大事

なことだと思う。

「群集心理の怖さ」というのを最近特に感じる。例えば、誰か人が倒れていても日本人というのはパッと声をかけれない。自分が走って行って「どうですか、具合が悪いんですか、救急車を呼びましょうか」って言わない。学校の中でも、地域の中でも、子どもが具合が悪そうにしていれば、すぐ声をかけてやらなくてはいけないのに、どうもそれができなくなってるんじゃないかという気がしてならない。

私はすごいお節介ですから、車で通っていても、子どもがかたまっていると車を止める。「いじめやせんかね」と覗いたりする。そういうおじさんとおばさんがたくさん増えればと思う。

子どもは小学校から中学校へ移る時に、本当にちょっとした歪みでつまづく。中学校から高校でちょっとした段差があることで大ケガをする。そんなことが高校に来た時にはもう手遅れになっていることがたくさんある。保・幼・小・中・高の連携を強化していく必要がある。

今日、いただいた資料の「人権教育の指導法等の在り方について 第一次とりまとめ」は素晴らしい資料だと思う。この資料のとおり学校教育も社会教育も、いわゆるすべて地域も含めて生涯教育としてこれを取り組んでいけば、人権教育というものが推進されていくと思った。人権教育の目的というものは、人権感覚を身につけて、そしてこれが行動化をされることで、私もそのとおりだと思う。

学校の中で、子ども同士のコミュニケーション、先生と生徒のコミュニケーション、家庭においては、親子のコミュニケーション、こういうものが否定されている。

「差別というものは=コミュニケーションの断絶である」と言われているが、コミュニケーションをができれば、必ず人を理解することができる。理解すれば、そこには差別やいじめや排斥や、そういうものはなくなる。すべての教育活動、家庭教育も、学校教育も、地域社会も、すべてコミュニケーションを基盤にした教育の営みが、行わなければならないと思う。その中から、人権感覚というものが養われていくと考えている。

私は幼稚園の場で生活をしている。幼稚園が安心して過ごせる場、自分の居場所、自信、本当に一人一人の良さが認められること、先生に対する信頼関係、友達にも自分の良さを分かってもらえ、そしてお互いに認め合う友達関係。そういった中で、一人一人の子どもたちが本当に自由感を持って、やりたいことに取り組めるような環境づくりが必要だと思う。

そして、私たちも、子どもたち一人一人が心を開いてくれるように、それぞれの発達に応じた経験ができるようにカリキュラムを作成している。先ほどから不登校の子どものことやいじめの問題の人数とかを色々お聞きして、本当にその一人一人の子どもにずっと長くつきあって、その子どもの気持ちになってわかって、不登校の子どもが「あ、じゃあ学校へ行ってみようか」とか、いじめる子どもやいじめられる子どもの気持ちになって、「ああ、じゃあ、やっぱりそんなことはいけないことなんだ」とか、「もうちょ

っと勇気を出してやってみようか」とかいう思いになれるように、私たち大人がどういうふうに関われるか。また、自分が1人でもそういった子どもに関わって力になれるような、その子が社会に復帰できる。学校へも行けるような力になってあげたいなということを感じながら聞いていた。

CAPの方のお話を聞いて、大切なことの3つの権利「安心・自信・自由」というふうな権利があることも聞いて、幼児教育でもこういうことを大事に日々の保育をしているということを感じた。その中で、自分の権利を守るために「イヤだ」「いやなことは友達に言おう」「逃げよう」「いやなことをおとなに話そう」と言おうと言われたが、今度は私たちが子どもが本当に困った時にそういった悩みを打ち明けてもらえるだけの、その子を受け入れるだけの力量、思いを受け止めるだけの、相談を受けられるだけの人間になれるのかどうか、もっともっと勉強していかなければいけないと思った。

私は、地元の娘の中学校のPTAの役員をしている。郡Pの大会の研修会をワークショップ形式でやった。その時に、「望ましい親子関係を作るには何が大事か」をキーワードで出してもらった。そこで多く出てきたのが、「コミュニケーション」だとか、「会話」「毎日顔をあわせること」「ご飯を一緒に食べること」「愛情・愛を伝えること」とかが出てきた。

コミュニケーションというのはすごく大事で、コミュニケーションをすることによって理解が得られ、信頼関係が築かれると思う。そういうことをおとなが気づく、学ぶ、それを感じることは私は大事だと思っている。

私もこども条例の作成に携わったが、そのなかで、中学生・教職員・保護者・地域の人でワークショップをしたことがある。その後の感想で、子どもたちが「おとなと話をするっておもしろい。」と言っていた。民生委員の方も「またやるやったら、他の人も誘うからぜひ声をかけてくれ。」と言ってくれた。そうやって同じテーブルにつくことがすごく大事だと思った。

私自身も子育て中の母親として、日々感じる。毎日毎日、新聞で取りざたされることは、子どもが巻き込まれている問題がほとんどだ。今日も虐待で問題になった記事が出ていた。子どもたちの心の叫びって本当はどこにあるのか。子どもたちは本当に自分の気持ちをどれだけ分かってくれているかを感じた時に、心を開いてくれるんじゃないかと思う。おとなは、世間一般の価値観で子どもを押さえつけがちな部分がある。だから子どもは、どんどん自分の心を閉ざしていくんだと思う。それがいつか鬱屈になって、いろんな行動で自分を表現してしまう。

小学校のPTAで、「何ができるだろうか?」ということで、「心のポスト」に、子どもたちが何でも、その日にあったことでも良いし、楽しいことでも辛いことでも良いから、手紙に書いてもらえたらいいなと思って、話を進めている。

子どもたちは自分の悩みとか、しんどい気持ちとか、悲しい気持ちっていうのを上手く表現しきれないように思う。言葉でちゃんと「しんどいよ」っていう表現ができないと

思う。そこで、手紙を書くことによって、自分の問題点、悩みを自分自身で見つめて整理して、また返事を待つ。その行為だけで解決ができるかどうかというよりも、自分自身で何か少しずつ成長していけるんじゃないかという目的が1つと、本当に問題を抱えてる子どもたちの気持ちを聞ける大人が周りにいるのかどうか。そういった面で、もしかしてその「心のポスト」が、何かの救いになったらと考えている。

人間はずっと失敗ばかり。それはおとなになっても繰り返す。実は金曜日の夜、私は寝ようと思い、寝る準備を自分1人でしていた。私は体に障害があるので、夜1人になったら、何かがあった時の緊急を知らせるベルを必ず持っている。それを絶対に横になるまで離してはならないという、絶対分かり切ってることなのに、魔が差したように、その日、そのペンダントを自分の首から外して横の棚に置いて、寝るセッティングをしていた。そしたら、その日に限って転んでしまい、案の定、私は身動きが取れず、どうすることもできなくなった。ベルも取れない。大声で叫んだ。隣に人が住んでるので、大声で叫んだ、一生懸命。でも、やっぱり聞こえない。とうとう私、7時間半、転んだまますっとその体勢で朝を迎えた。これはもう絶対にしてはならないことなのにしてしまった。それで、私はこの転んでる瞬間に、今度こそもうやばいかなと思った。もう生きる・死ぬの瀬戸際の生活をしているので、これも自分で選んだ生活でそういうミスをしたという、これは本当に恥ずかしいことだけど、命が助かったからこうして人前で言える。でもこれは、離れてる両親には黙っている。今日もさっき用事があって市内に来るので、言おうと思えば言えるんですが、それを言うと親がどれだけ心配するかというのが分かってるので、絶対に言えない。1ヵ月後に言おうと思っている。親だから言えないこともある。でも、私はこうやって人には言っている。子どもも、親に言えない、友達にも言えない、でもこの人には言えるっていうことを何らかの形で言った時に、聞いた人はそれをきちんと子どもに返してあげて欲しい。

そして子どもたちには、「失敗をしてきたんだよ。父さんも、母さんもね。こんなふうに思って、それでも今仕事でこんなに苦労してて、これやけど父さんは頑張るで、君らのために。」と伝えて欲しい。子どもも、「父さんだって頑張ってるんだから、僕だってこんなこと言っていないで頑張ろう」と思うかもしれないし、立派な、強い、賢いおとなを見せるよりも、「失敗しても、こんなふうに頑張る方法だってあるんだ」ということを伝えられるおとなであることが大事かなと思っている。

子どもの小学校のPTAの会で公園でたむろしている子どもの課題が必ず出される。その時に、みんな「怖くて声かけられない」と言うが、それは保身だと思う。「でも気になる。あの子達が心配」と思い、いわゆる良心から出た言葉というのは相手にきっと伝わると思う。私も夫も、目の前にいる子どもには声をかけてきた。今まで刺されたこともないし、リベンジされたこともない。居場所がない子どもたち、高校へ行けなかった中学OBの子らが、夏休みずーっと公園を居場所に過ごしていた。夫はそこを夕方ジョギングしながら、毎日毎日、「暑いにゃあ」とか、「おまえら仲間か」とか、「友達大事にせ

えよ」とか、一声をかけてきた。そんなことが1ヵ月ぐらい続いて、夜「ちょっともう一走りしてくる」って行った時、深夜、ビールを子どもが買っていたそうだ。「おお」って言ったら、向こうが「まずい」っていう顔をしたそうだ。で、「おまん、未成年やろう」って言ったら、子どもが「うん」「えへへ」って。夫が、まあしてはいけないことではあるが、極小缶を買って渡して、「体に気つけよ」って言ったそうだ。私も夫も、肩書きではなく、地域の住民として、気になる子には怖いというよりもまず気になるからかけざるをえないという、そういう良心を持ち続けられるようなおとなでありたいと思っている。

人権感覚というのは、学校だけの指導では、子どもたちにはなかなか身に付きにくい状況があると思う。学校というのは、もちろん、パーフェクトではない。子どもたちもいろんな課題がある。問題も出る。けれども、それに対して生徒が、教師が、保護者が、地域が、どのように取り組んだのか、どのように話し合ったのか。その過程が一番大事だと思う。

私の学校も、カウンセラーの方もいるし、いろんな問題も出る。が、基本的には、問題をなくすよりも、問題が出た時にはキチッと話し合いをし、取り組むこと。その中で、その過程によって子どもたちも成長していくし、また教師も成長していく。だから逆に言えば、どんどん、学校現場にいろんなことを言ってきてもらいたいと思う。

皆さんの議論を聞きながら、僕自身も「あ、そうだな」と感じた。僕も今、地域の人たちとよくワークショップをする。実は、昨日の夜やっていたが、土佐清水市で、いろんな課題をどういうふうに解決していくかを、住民の人たちと考えていった。例えば、働く問題とか、防災の問題とかあるが、どこの地域でも出てくるのは子どもの問題が出てくる。そして、その子どもの問題をどういうふうに解決するのか、地域住民に投げかけていく。自分でできること、地域でできること、自分たちではできないから他の機関に応援を求めないといけないこと。そういうことを出していく中で、その地域は出生率、4歳以下の子どもが6人とか7人の地域だったんですけど、「子どもが少なくなってる地域だからこそ、子どもは大切にしなきゃいけないね」ということを言われた方がいた。「ああ、本当にそうだな」と思った。そんなふうに、「感じて、気づいて、そこから1人が学んで動いていく」ということが、地域の中でできていったらいいなと思う。

僕自身も娘がいるが、同世代のお父さんやお母さんと話していると、自分の子育てに本当に悩んでいる。「本当にこの子育ては良いのかどうか」一緒に考えて、一緒に学んでいける。そして、そこで何か気づいていける、そこから子どもの人権や、一人一人が大切にされていくことを見つけることができるのではと思う。

どの子どもも成長させていくということが学校の役割なら、丸ごと子どもを認めるところからスタートすること。これは教師が子どもの行動を正しいとか正しくないとか判断するよりも、やはり子どもを抱きしめるように丸ごと認めるということがすごく大事だなと私は感じた。

今、児童生徒の不登校が高知県はワースト1である。高知市は、なりふり構わずこの不登校に取り組んでいる。南国市も取り組んでいる。確かに、「不登校の児童生徒を、ただ%だけ下げればいいということですか？」という反論もある。私は、それだけにこだわっているわけではないが、取り組んだ結果、絶対に%にもなってくるはずだ。

だから、これはただの数字のことを言っているのではない。就学保障ができていないのに、学力保障ができるはずがない。学校へ来ていない子どもにどうやって 学力をつけるのか。そう考えれば、数字も結果として大事だと思う。

それぞれの委員さんからは、改めて子どもの人権を守るためのおとなの在り方、コミュニケーションの問題、そして地域・家庭・教師、それぞれの役割が改めて認識されたと思う。私は、子ども同士の中で人権感覚がもっと養われるような関係や環境が必要だと思う。

私は終戦前・後の教育を受けている。室戸岬にも爆弾、艦載機がどんどん来た。その時は小学校4年生以下が学校へ登校し、5年生以上は学童動員だった。私たちが登校している時、艦載機が来た。僕は1年生だった。4年生の上級生が僕らを橋の下へ入れて、自分が逃げ遅れて流れ弾で死んだ。他の1人は足を負傷した。私は、お盆には必ずその先輩の墓へ参りに行く。いじめの問題では、私の子どもの時は、下級生とか同学年の弱い者をいじめる奴には食ってかかっていった。ケンカしていた、上級生であっても。そういうような、自然の感情があった。それから、先輩が泳げない子を川へ連れて行って放り込んだ。1年生になったらもう泳げないかと。そのかわり、先輩は下で受けてくれた。おぼれかかったら助けてくれた。

子どもの中にそういう行動や感情が自然に出て来る教育やしかけができないかなと考える。これは、当然子どもだけじゃできない。おとなも、学校も、地域も含めてやらなければならないが、そういうところから人の大切さとか、命の大切さ、そして正義感、あるいは不条理に向かっていく行動とか、いろんな人権感覚がは養われてくるのではないかと思う。

## 5 閉会